



表紙デザイン／岡本剛



## 基幹教育院ニューズレター

基幹教育院新院長挨拶  
 教員紹介  
 授業紹介  
 (高年次基幹教育科目・文系ディシプリン科目)  
 基幹教育院からのお知らせ  
 (学会案内、「基幹教育紀要」創刊)

発行 九州大学基幹教育院 〒819-0395 福岡市西区元岡 744 <http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/>

## 基幹教育院からのお知らせ

学会案内:

### 大学教育学会

大学教育学会第37回大会(2015年度)が6月6日(土)~7日(日)に長崎大学(長崎県長崎市)にて開催予定です。「ところで学生は本当に育っているだろうか」を統一テーマに、基調講演を「考えるとはどういうことか」という演題で立花隆氏に、シンポジウム「学生の育ちをみる」では、講演者として丸野俊一基幹教育院長も登壇致します。基幹教育院の木村拓也准教授が大会実行委員として運営に関わっています。詳細は、大学教育学会ウェブサイトを参照ください。

大学教育学会ウェブサイト: <http://daigakukyoiku-gakkai.org/site/conference/conferenceinfo/>

### 「基幹教育紀要」キックオフ記念号が刊行されます

基幹教育紀要は、基幹教育を充実・発展させていく様々な研究・開発・実践報告を、基幹教育にかかわるすべての教員で共有し、共に考えて行くことを目的とします。記念号には26年度5月に開催された基幹教育キックオフシンポジウムの基調講演も含め、以下のような論文・報告が掲載されます。



#### [創刊号目次]

創刊にあたって 丸野 俊一

《特集》 基幹教育キックオフシンポジウム基調講演

基調講演I: 大学における教え方を問い直す —20世紀型から21世紀型へ— 鈴木 典比古

基調講演II: 教育のオープン化 —いったい何が起ころのだろう— 宮川 繁

《論文》 インターンシップ経験が卒業後のキャリア形成に与える影響 武内 真美子

シリコン・バレー・ベンチャーにおけるインターンシップ経験が起業意思に与える影響に関する探索的研究 玉置 浩伸

《報告》 基幹教育セミナーの実施体制について

野瀬 健, 飯嶋 裕治, 小島 健太郎, 佐合 紀親, 斎藤 新悟, 猿渡 悦子, 田中 岳, 内田 竜也

基幹教育「課題協学科目」 古屋 謙治, 大河内 豊, 島田 敬士, 田中 岳, 野瀬 健, 山形 伸二

環境教育におけるPDCAサイクルの導入 富板 崇

教科としての「日本語」— 学士課程国際コースでの経験から— 小山 悟

総合科目「科学の進歩と女性科学者」の実施報告 渡邊 壽美子

An overview of the university english curriculum: a conceptual framework for curriculum innovation Sachiko YASUDA

芸術工学を背景とする基幹教育に関する報告 尾方 義人, 劉 瑾

\*紀要そして投稿に関するご質問は基幹教育紀要編集委員会 (bulletin@artsci.kyushu-u.ac.jp) にご連絡ください。

#### ◆編集後記

寒空に梅の便りを聞く頃となり、基幹教育の最初の1年がしめくりを迎えようとしています。センター1号館の階段を昇る見覚えのある横顔に声をかけると、「元気です」と答える前期セミナーの学生。新入生だった春の日がまるで昨日のこのように思えた一方で、どこかあか抜けたその姿に時の流れを感じました。1年を振り返ってみると、基幹教育セミナー、課題協学科目、ディシプリン科目と、新しい科目を抱えて全速力で駆けぬけた年であったように思います。と同時に、学びとは何か、一步一步模索してきた道程でもあり、それは来年度の基幹教育院の新しい試みに何らかの形でつながっていくのかもれません。ニューズレター第2号では、新院長挨拶をはじめに、来年度スタートする「高年次基幹教育科目」、充実化がはかれる「文系ディシプリン科目」の紹介、教員紹介そして「基幹教育紀要」創刊のお知らせを載せることができました。今後も、教員・科目の紹介記事に加え、基幹教育院に関わる様々なニュースを発信していく予定です。最後に、突然のお願いに快く寄稿してくださった先生方に編集委員一同深く感謝申し上げます。(JA)

## 巻頭言 (基幹教育院新院長挨拶) 丸野 俊一

平成23年、10月に、前有川総長の任命で、私が基幹教育院長に就任した時の重要な使命は、“豊かな教養に支えられた広い・深い専門性を持ったアクティブ・ラーナーを育成する”新教育システムの構築であった。その背景に、平成3年(1991)の大学設置基準の改正、その後に続く「大学院重点化」の波によって、教養教育が形骸化してきたことへの深い反省があったことは言うまでもない。システム構築にあたり、与えられた重要な課題は、次の二つであった。

一つは、従来の教養(基礎)教育という概念を越えて(2階建て構造システムからの脱却)、入学段階の初期から学部・大学院に至るまで、自律的に学び続けるための「基幹」(考え方・学び方を学ぶ心の習慣・態度)を涵養する一貫した教育カリキュラムの体系化であった。各段階・位相で求められる適切な基幹を涵養することで、考え方・学び方に多様性と深さが増す知の好循環のサイクルが機能する仕掛けづくりに心掛けた。入学段階での「基幹」の涵養は、“高校までの学びモードを大学での学びモードへチェンジする”こと、学部専門課程では“特定分野の学びに満足せず、異分野・異文化との知の交流や関連づけ”、大学院では“未踏な領域を創造・創出していく過程で育まれる斬新な学び方・考え方”の涵養である。その基底に流れているもの、それは、学問(世界)知と現実世界(日常知)とを往還する探究の姿勢を通して、学生一人一人が自己の可能性を引き出し・育み合う、という教育の理念である。

二つ目は、基幹教育を実施・運営していく責任母体となる「基幹教育院」の組織作りであった。その組織体は、各部署から選出した研究力に優れ・教育熱心な約20名、有川総長のリーダーシップのもとに新たに捻出した20数名分の新規ポスト(公募により全国から優秀な人材を確保)、従来の高推センターに所属していた約15名、旧健康科学センターに所属していた約15名、総計約70名からなる組織である。基幹教育は、基幹教育院に所属する教員が基幹教育をマネージ・運営していく主体になるものの、実施にあたっては、全学出動体制のもとに、全学の英知を集めて実施して行くシステムになっている。

2年半に渡る、学び方・考え方に軸足を置いたカリキュラムや教授形態やクラス編成作り、及び組織作りを終えて、平成26年4月から新カリキュラムがスタートした。基幹教育元年にあたり、大学での核となる学びモードへのチェ



## 高年次基幹教育科目

基幹教育院教授 原田 恒司

平成27年度より、2年次以上の学生を対象とした「高年次基幹教育科目」が開講されます。平成27年度は全学教育の「高年次教養科目」との同時開講となりますが、平成28年度以降は「高年次教養科目」は開講されず、「高年次基幹教育科目」が読み替え科目となります。

基幹教育構想全体の中で、「高年次基幹教育科目」は初年次教育で培われた「学び方を学ぶ」基礎をさらに発展させるという重要な意味を持っています。基幹教育は初年次だけで終わるわけではなく、4年一貫して続けられ、さらには大学院基幹教育へと繋がるものです。2年次以降の学習は各学部学科の専攻教育が中心になることは当然ですが、基幹教育は専攻教育と相補的な役割を果たすことが期待されています。

「高年次基幹教育科目」とは一口で言うとどんな科目か?と聞かれたら、一口では答えられないようなバラエティに富んだ科目群だと言うしかありません。あるものは専攻科目を補うようなテーマを扱い、あるものは全く異なった視点からのアプローチを提供してくれるものでしょう。専門の学習だけでは得られない、開かれた知の科目群です。

このような新しい科目群の開講に向けて、総合科目・高年次基幹教育科目班は1年間準備をしてきました。分散キャンパスで開講されることもあり、多くの科目が各部局から提供されるという事情もあり、開講についての調整は主に部局を代表する先生との間で行いました。平成27年度から予定通り開講できるのはこれらの先生方のご協力によるもので、大変感謝しています。

これから大学院基幹教育科目の開講、基幹教育カリキュラム全体の見直し、クォーター制の導入、国際教養学部(仮)構想、箱崎キャンパスの移転と、非常に流動的な環境にあるので、(まだ開講もしていないのに少々気が早いですが)それに合わせて適宜見直しをしていかなければならないと思います。



## 文系ディシプリン科目

基幹教育院教授 新谷 恭明

文系ディシプリン科目では文系各領域のディシプリンがどういうものであるかを学んでもらいます。現在開講されているのは哲学・思想入門、社会思想史、先史学入門、歴史学入門、文学・言語学入門、芸術学入門、文化人類学入門、地理学入門、社会学入門、心理学入門、教育学入門、日本教育史、法学入門、政治学入門、経済学入門、経済史入門、The Law and Politics of international Societyの17科目です。The Law and Politics of international Societyは英語による講義になっています。



また、人文科学研究院がEEP「文系ディシプリン科目教科書・副教材の開発」の作業を進めており、まずは「文系ディシプリン科目授業パンフレット」の試作が進んでいます。これが軌道に乗れば文系ディシプリン科目の内容も充実してくると思います。

文系のディシプリンは知識の量ではなくその技法と思考法にあります。ところが、文系の学問には高校時代には暗記科目だった傾向のものがあるわけで、歴史などはその代表かもしれません。私の担当する「日本教育史」も歴史科目ですが、歴史的な問題意識を持つ、史料を通してものを考える、といった思考様式を獲得してもらうようにと工夫を

します。そして、調べること、読むこと、書くことといった訓練もさせたいと考えています。

しかし、学生諸君にはいわゆる調べ学習の習慣が身に染みついていて、情報リテラシーをはじめとして、学び方の基本をきちり指導していかなくてはならないと痛感しています。

ディシプリン discipline の語源はラテン語の *disciplina* で、その意味は「弟子を教えること」のようです。文系ディシプリン科目を通じて、若き弟子たちに大学での研究に軸足を置いた(知)の伝授をしていきたいと考えています。

ンジを目指す代表的な「基幹教育セミナー」や「課題協学科目」に対する学生の学びの姿勢や教員一人一人の教授手法は巧く機能するか否か、全学出動体制はスムーズに動き出すか否か、基幹教育院長としての悩みは尽きない。だが、時間をかけての用意周到後のスタートである。始めから、完璧性を求めてもきりが無い。歩み出すまでは予想もしなかったような、新たな問題を、動きの中で中にキャッチし、それらの改善に向けて日々努力精進していく学びの姿勢を、学生・教員が一体となって創り上げていくことが、何よりも重要である。基幹教育がスタートし、前期が終了した段階で、新たに改善・改革していかねばならない課題が浮上してきている。前向きに取り組んで行かねばならない。

平成26年、10月には、久保新総長が誕生し、新たな執行部がスタートした。基幹教育院長として、新教育システム構築に約3年間携わって来た私の任務も新総長の誕生とともに、交代するものと思っていた。だが、「基幹教育という「枠組みはできたが、中身に魂が入らず」では、改革に踏み出した意味がない。今からが、本格的な基幹教育の「魂」づくりの始まりである。その「魂」づくりのために、今しばらく、努力してほしい」ということで、基幹教育院長に、再び就任することになった。微力ながら、皆様のご理解・ご支援を得ながら責務を果たしていくつもりである。

私は、基幹教育の“魂”作りに成功するか否かは、基幹教育に携わる全学の教職員の基幹教育に対する重要性の認識とその実現に向けての責任ある態度に依存している、と考えています。基幹教育を受けた学生が専門教育・大学院、さらには社会に進んだ時に、従来の学生とは異なり、「多様な学び・考え方を身につけ、未踏な領域にも臆することなく果敢に挑戦する探究心と逞しい精神力を持つ人材に育っている」と国際社会から高く評価されるような、“九大ブランド”を、是非とも、皆さんと一緒になって、創出していかなくてはなりません。

しまだ あつし  
島田 敬士

教育実践部情報科学部門准教授

こんにちは。基幹教育院・情報科学部門の島田敬士と申します。1999年に九州大学・工学部・電気情報工学科に入学して今日まで約16年間、九州大学で活動しております。幼い頃から情報技術に興味を持っていて、特にテレビゲームやPCなどに触れながら「将来こんなことできたらいいな」という夢物語をいつも考えていました。九州大学に入学後、情報処理技術をはじめ様々な専門分野の勉強をして、あの当時に思い描いていた夢をひとつずつ達成させるべく、日々教育研究を進めています。

私の専門はパターン認識という情報技術のひとつで、特に画像情報を利用した動作認識技術や情報検索技術についての研究に取り組んでいます。左の写真は、動作認識に関する研究成果のひとつで、スクリーンに投影されている格闘ゲームは私が幼少時代に遊んだテレビゲームの現代版です。当時は専用コントローラで操作していたキャラクターを自分の動作で直接操作することができるようになります。また、右の写真は、画像解析を利用した情報検索に関する成果のひとつで、スマートフォンで検索したい対象を撮影するだけで関連する情報を得ることができるので、検索フォームへのキーワード入力が必要なくなります。

情報技術は今や私たちの生活の基盤となっていて、知らず知らずのうちにその恩恵を受けています。しかしそれがあまりにも日常的であるために、情報技術がブラックボックス化された便利なツールとして捉えられがちで、専門家以外がその中身を理解することが難しくな

ってきています。基幹教育の情報系科目では、学生の皆さんが興味をもってブラックボックスの中身を少しずつ紐解きながら理解を深めてもらえるように、情報技術の応用事例を紹介しながらトップダウン的な教育を実践していこうと考えています。どうぞよろしくお願いたします。

